

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 金 季 村

本論は横光利一の主要作品を時代順にとりあげ、横光が「長篇小説」という形式を通してどのような方法的試みを展開したのかを、表現史的な観点から解明したものである。

構成は三部からなる。第一部では初期短編から『機械』までを対象に、言葉の物質性を重視し、現実から遮断された抽象世界を構築していった点に初期横光の特徴を見出している。ただし『機械』前後からこうした方向は転換し、口語的な語りが見直されると共に、自己言及的な表現が語りの主体の自明性を崩す方向へと向かい、これが後の「長篇小説」の方法を準備することになるとしている。

第二部においては、『上海』から『紋章』までが取り上げられている。初の本格的な長篇である『上海』においては、国際的な租界地で登場人物のナショナル・アイデンティティが揺らいでいく様相が明らかにされ、同時に改稿過程を通して植民地における加害者性に関わる記述が削除されていく過程が明らかにされている。また、『紋章』においては、その輻輳した時間構成の分析をもとに、内容のみならず、それが語り出されていくプロセスまでもが浮き彫りにされるメタ・レベルの構造が明らかにされている。結果的に、一見日本主義へと傾斜していくかに見えるその内容が、語り手自らに統御できなくなるその機構を通して、結果的には読者を誘い込む亀裂として機能することになるのであるという。作品解釈にあらたな知見を示すものとして注目される。

第三部においては、戦中の長篇小説『旅愁』と、戦後、最晩年に書かれた『夜の靴』が扱われている。島崎藤村の『夜明け前』において、視点の自在な移動が個人と歴史を合わせ見る独自の形式を可能にしている点に着目した上で、『旅愁』における登場人物の空間移動の特性が分析されている。「日本人」としての自覚が「国境」を移動することによって自己相対化されていく有りようが「換算」という概念を通して明らかにされ、こうした志向と、「祖国」が絶対化されていく志向とのせめぎあいによって作品世界が成り立っている事実を指摘している。起源としての「日本」を言語化しようとするほど、逆にそこから遠ざかってしまうという事実は、文学とナショナリティの問題を解明する糸口として注目に値するものである。また、『夜の靴』に関しては、「私小説」への再帰と捉えられていた従来の評価に異を唱え、共同体的感性から敗戦があらためて意味づけ直されていくメカニズムが明らかにされている。

以上のように、本論の特色は語り手の一義的な統御を離れ、むしろそれを裏切るような形で虚構が生み出されていく点に「長篇小説」というジャンルの特性を見ようとするもので、単に横光利一に限らず、日本の近代小説の分析に重要な視点を提供するものと考えられる。具体的な表現分析にさらにより多くの紙数が必要と思われる箇所も見受けられるが、小説を単に主題論的に意味づけるのではなく、これを言葉の構造体として捉え、既成のナショナリティを相対化していく機能を導き出していこうとする発想は、今後の研究に重要な示唆を与えるものである。

以上の点から、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。